

学生の心を掴む生きた教育

—教学双方の意識転換によるアクティブ・ラーニング—

Motivated Education: Seize the Real Needs of Students

—Active Learning from Paradigm Shift of both Teaching and Learning—

李 東浩*

Donghao Li

本文はこれからあるべき教育の姿を探求する一事例研究である。独自の4年間アンケート資料により授業の初回から学生の真のニーズを把握し、学びの姿勢と意義を最初から意識転換させる。一方、従来の詰め込み型教育から脱却するため教員の意識変革と行動も要請されるので、5つのモジュールからなるアクティブ・ラーニング教育法の開発と実施により、学生の心を掴み、やる気と質の高い生きた教育の実現に結び付くことが検証される。

キーワード：意識転換 アクティブ・ラーニング 心を掴む やる気 生きた教育

I. 本論文の目的（研究課題）

近年、学生の能動性を発揮するアクティブ・ラーニング（能動的な学習）への関心が高まっている。従来のような教科書・レジュメと教員による一方的な知識伝達型教育ではなく、学生の主体性を重視し、学習へ関与（*Involvement in Learning*）させてもらうこともますます大事になっている（三浦 2010）。そもそもアクティブ・ラーニングの概念に関しては、約30年前の1987年に、「優れた授業実践のための7つの原則」（以下「7つの原則」と呼ぶ）（Chickering and Gamson 1987）といった論文の中で、アメリカの大学教育界（米国高等教育学会）に提唱されて米国へ一気に普及してきた。分量が薄い5頁の一短文（参考文献を除けば、4頁のみ）だったが、多大な実行力と影響力があったので、「7つの原則」をまとめたチェックリストの4つの小冊子まで全米半数以上大学の教員・学生へ配布するようになった（中島・中井 2005）。

日本の大学教育界におけるアクティブ・ラーニング理念の普及は11年前の2006年から始まったという指摘もある（近田・杉野 2015）ので、実はその歴史は長くないようである。その中、京都大学高等教育研究開発推進センターによる数多くの研究（溝上 2006, 2016）、関西大学教育推進部が2010年から継続的に行われた研究（三浦 2010, 三浦ら 2016）、神戸大学教育推進機構・神戸

*流通科学大学商学部，〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

大学国際協力研究科による研究（近田・杉野 2015 米谷 2016）、名古屋大学高等教育研究センターによる研究（中島・中井 2005）などがある。また本学の高等教育推進センターなどでも、日本独自ともいえるべき全学的公開授業 FD 制度やケース授業による教育の活性化に関する研究（南木 2005, 2010 西尾 2006, 2013）など多い。

少子高齢化と大学全入時代とともに、大学での教育法と内容そのものも変革と改善する必要がある。そのなか、以下の2つの意識転換（パラダイム・シフト）が必要ではないかと思われる。

つまり、意識転換1：「研究」から「教育」へとシフトすること及び、意識転換2：教員中心から学生中心へとシフトすることである。意識転換1とは、研究型大学であれ教育型大学であれ、研究業績の過度な偏重への反省とも言うべきだろう。意識転換2とは、教員の「自己満足」的な教育から「学生満足」への是正とも考えられる。

この2つの意識転換は、従来の「How to Research」と「How to Teach」から、「How to Learn」と「How to Teach」への変身をある程度意味するのではないかと思われる。ここで大事なものは、学生の真のニーズを満たし、学生の心を掴む教育¹⁾への意識転換が必要だと思われる。

近年、大学生の学力低下への指摘意見もよく耳にする。学力低下の問題は本学だけではなく、日本全国の大学教育の問題でもある。筆者も4年半前、国立大学から現任校の私学大学へ着任した時、「出席率低下、やる気・学習意欲なし、私語、居眠り」などの局面を迎えたことはまだ記憶が新しい。今現在でも気が引き締め、教育現場で学生の勉学意欲を引き出す努力が一刻も緩められないと日々感じている。

新しい大学教育の時代においては、従来の知識詰め込み型を中心とされた教育法はすでに学生のニーズを十分に満たせなくなり、教育の効果も低いので、まるで死んだぶりの教育と言っても過言ではないだろう。一方、教員と学生といった教育の双方の意識転換に基づき、教員の心を込めた熱意ある創意工夫により、学生を学びの意義を十分に分かってもらい、教員と学生、学生と学生の中に、互いに刺激を与え合う「生きた知識創造の場」のような教育こそが新型教育の一理想像ではないかと思う。筆者はこのような教育を「生きた教育」と呼ぶ。この生きた教育では、教員が果たすべき役割は非常に重要である。なぜならば、学生の学力低下や学習意欲なしなどの問題を解決するために、学生側だけではなく、より大事なことは教員側の問題を解決する必要がある。言い換えれば、教学双方の意識転換（パラダイム・シフト）が同時に要請される。

本論文は、まず学生の真のニーズとは何なのかを把握して分析しはじめる。その後、教育側特に教員が如何にこれらのニーズに対応すべきか、そして対応の効果について分析を行う。独自の4年間授業アンケート・データに基づき、学生のニーズを把握・確認・満足し、学生の心を掴むといった新しい教育法を開発し実施する。実施の効果を詳細なデータで分析し、やる気と質の高い生きた教育の一現場の実況を明らかにする。

以下、本論文は、Ⅱ. 現状把握と学生の真のニーズの確認、Ⅲ. 「ファイブ・モジュール教育法」:

独自のアクティブ・ラーニング教育法の開発、Ⅳ. 「ファイブ・モジュール教育法」：独自のアクティブ・ラーニング教育法の実施、Ⅴ. 発見事実、示唆及び残された課題、の順に分析を進む。

Ⅱ. 現状把握と学生の真のニーズの確認

日常の教育現場では、学生の心（関心事＝ニーズ）を掴むことは重要である。学生の本音を把握できないと、適切で相応しい教育も提供できない。

ここ数年、様々な形で学生の本音や意見を聞いたことはあるが、一番印象が深いものは以下の意見である。一番心に痛みを感じさせられた意見でもある。ある程度の代表性もあるではないかと思われる（この学生は4年前、筆者の基礎演習Ⅰクラスに在籍し、現在4年生である）。

「本来この大学でまじめに勉強しようとしたが、しかし周りにはほとんどが怠け者ばかりです。この大学ではほとんどの授業は私語が多く、静かに受講できる環境はないです。この大学へ本当に失望しました。しかし、この授業は、いつも私語が少なく、とても聞きやすく、授業の意欲をそがれるようなことがないです。私語があったとしても SAの方が注意してくれているので、ありがたいと思っています。この静かな授業を保つのは大変かもしれませんが、これからも頑張ってください。」

この意見を聞いて、あまりにも衝撃が大きすぎて、正直「今こそ改革をしないと本当にこの大学が危ない、死ぬのは時間の問題ではないか」とすぐ頭にこの考えが浮かび上がった。

日々の教育では、我々教育側は一体どれほど学生の真のニーズを把握しているか、静かで真面目な受講環境は如何に重要なのか、どうやって学生のニーズを適切に満たせるか、これらの数々の問題を今一度考えなおさなければいけない。

よって、筆者は4年前、授業の一回目に履修動機など学生のニーズに関するアンケートを実施し始まった。加えて、毎回の授業で授業まとめ文の実施とフィードバック、中間アンケートの実施及び期末教務課の授業改善アンケートの実施により、絶え間なく常に学生のニーズと学習状況を把握し対応を図ってきた。すべての授業の一回目に、履修動機等に関するアンケートを実施する。実施内容は以下である。

1. 履修のきっかけ（先生・先輩・友達からの勧め？或いは自己意志？）
2. 履修動機（知識・能力優先？授業方法・規律優先？単位優先？漠然？）
3. シラバス（シラバスをどれくらい読んだのか？詳しく？ざっと？全くなし？）
4. 授業のやり方（この授業の進め方・毎回まとめ文について、どう思うか？）
5. 学習計画（この授業の自分の学習計画：毎回真面目に出席？積極的に？適当に？）
6. 要望や提案（この授業をより効率的・より有意義にするための考えはないか？）

表1はその内容の一部概要である。

表 1 各年一回目アンケートの一部概要

番号	質問科目	内訳	一部の回答の抜粋
1	履修のきっかけ	客観的な影響要因：先生・先輩・友達からの勧め？或いは自己意志？	「先輩から『ためになる』と教えてもらい選びました」「李先生の授業をずっと履修したことあり、楽しかったから」「ほかの授業を履修したことがあり好きだから」「フリー時間を埋める」「生徒からの満足度(評価)が高い」「シラバスや周りの評価が高い」
2	履修動機	主観的な影響要因：知識・能力優先？授業方法・規律優先？単位優先？漠然？	「李先生の名前があった」「李先生のことを信用する」「上質な授業」「授業方法が面白い」「文章を書くのが好き」「日本だけではなく世界を見れる経営の仕方を学びたかった」「期末テストがないから」「単位が必要」「単位だけではなく、将来へ活かせる、積極的に履修したため」「興味そそられたため」「自分に合うため」
3	シラバス	シラバスをどれぐらい読んだのか？詳しく？ざっと？全くなし？	「シラバスが元の形がなくなるぐらい、熟読し読破した」「読んでやる気がわいた」「魅力を感じた」「とても興味を持った」「全員参加型の私の理想のやり方の授業で嬉しい」「充実した内容と感じた」「受動的ではなく、能動的な講義」
4	授業のやり方	この授業の進め方・毎回まとめ文について、どう思うか？	「好き」「他人の意見を聞けるので良い」「向上心・雰囲気・生徒に飽きさせない進め方が素晴らしい」「他の授業と違い、毎回真剣に取り組む、集中しやすい」「質問時間を設けてほしい」「時々聞きにくい言葉もある」「話しやすい雰囲気をしてほしい」「無駄な時間が少なく、時間厳守で素晴らしいです」「効率の良い授業」
5	学習計画	この授業の自分の学習計画：毎回真面目に出席？積極的に？適当に？	「毎回休まずに全授業に出席する」「前の日にしっかり寝る」「きちんと復習する」「余裕をもって期末レポートを作成する」「自分の役に立つ知識を身につけたい」「ビデオが討論につながっているので、眠気防止のためメモを取る」「毎回発言したい」「発言が苦手なので、発言しやすい場を作ってほしい」
6	要望や提案	この授業をより効率的・より有意義にするための考えはないか？	「もっと発言の時間を増やしてほしい」「まとめ文の時間もう少し長くしてほしい、留学生ですので」「録音と予習復習で対応したい」「もうちょっとVTRを見たかった」「DVDは今までの大学授業の中で一番面白い」「VTRを最後まで見たかった」「まとめ文は授業内容の理解を深めるためにはすごくいい方法」「私語の注意をもっと厳しくしてほしい」

出所：2013年から2016年まで各年の「経営戦略論」「企業倫理論」「国際経営論」「経営学入門」の一回目授業アンケート調査のデータより筆者作成。

表1より様々な情報の一部の様子が見えてくるが、より詳しく学生のニーズを確認するため、以下、アンケート回答情報を質問、内訳、説明、示唆のように順次明らかにしてみる（紙幅の関係で一部のみを掲示）。

質問1. 履修のきっかけ

内訳：客観的な影響要因：先生・先輩・友達からの勧め？或いは自己意志？

説明：この質問は受講生の履修に関する客観的な環境影響要因を確認するために設けられる。2012年以來すでに4年間以上、この教育法を開発・実施したので、履修した受講生による評判や口コミ、学修支援センターの教職員方やゼミの指導教員先生方の勧め、友人・友達・ゼミ同士の

勧め及び、周りの影響ではなく自己判断の意志などをも総合的に把握する。

回答の結果からみると、この4年間における4つの多人数授業では、自己意志や友人・学習支援センター・履修相談からの推薦が多く、ほぼ半々になっているようである。表1が示される一部回答内容のほかに、「学修支援センターの先生の勧めです」「一方的に聞くだけではなく、主体的にも取り組める授業方法が良いと感じたからです」「テストがない分、毎回のまとめ文はいいやり方だと思います」「友人も履修するので、一緒にこの授業を選びました」などの回答もある。

示唆：学生は一つの授業を履修する際にはまず外的で客観的な影響要因を参考にしたうえ、判断に進む。以前履修した経験のあるほかの人や周りの人による授業の評判・評価、教職員方による相談・勧めなどのアドバイスは授業履修に対して重要な判断材料の一つになりうる。

質問2. 履修動機

内訳：主観的な影響要因：知識・能力優先？授業方法・規律優先？単位優先？漠然？

説明：この質問は受講生の履修に関する主体的な影響要因を確認するために設けられる。主に履修生の授業そのものに対する自分なりの判断や心理的考慮を総合的に把握する。

回答の結果は様々自己的な理由がある。表1が示される一部回答内容のほかに、「シラバスを見てとても面白く、挑戦的な授業だと思います」「私は知識・能力優先だと思います」「世界の経営を学べそうだから」「海外と日本の違いを知る」「授業方法が面白い」「効率的授業」「もう慣れたから」「授業の雰囲気は良さそう」「『毎回、楽しい動画を見ます』という言葉にひかれた」「自分で考えることが多い授業」「高度な大学らしい授業を受けたかったため」「企業のことを詳しく勉強して社会人になるために準備する」「起業をしたいから」「考える力を身に着けたい」「やりがいがある」「『ブラック企業』を解明し知りたい」「選択必修」などの回答もある。

示唆：単位優先（後文の中間アンケート分析をも参照されたい）で「とりあえず」授業を履修して、何も考えずにただ漠然の受講態度で教室に臨む学生の数はもちろん多いが、他方、ある程度又は明確な勉学意識で真剣に授業を検討・選択・履修をする学生の数も少なくない。一部の真面目な学生は単なる単位を目指すだけではなく、この授業の進め方や内容そのもの（教育の質）、自分の知識獲得や能力構築、静かな受講環境や雰囲気、教員の評判・質・熱意など、本気で正しい受講態度で授業履修を決め教室に臨む。これこそが理想的なあるべき授業像ではないかと思う。

質問3. シラバス

内訳：シラバスをどれぐらい読んだのか？詳しく？ざっと？全くなし？

説明：学生がどれほど事前に授業の概要（シラバス）を読んだのかを確認するための質問である。普段、シラバスを読まない学生はごく普通で非常に多くではないかと安易に想定できるが、この教育法が実施する諸授業に関しては、それだけではないと判明している。

回答の結果からみると、ざっと・一通し・部分的にパッと読んだ学生が多いと分かる。全く読んでいなかった学生もいれば、詳しく読んだ学生も何回も読んだ学生もいる。表1からも分かるように、一部の学生は「シラバスが元の形がなくなるぐらい、熟読し読破した」などしっかりシラバスを何回も読んだ学生もいる。そして、「読んでやる気がわいた」「魅力を感じた」「とても興味を持った」などの結果も分かる。「授業の進め方と内容が面白い」「他にはない新鮮」「シラバスを見て興味を持った。授業形式が面白そうだと感じた」など似たような意見はまた多数ある。

示唆:「シラバスを読む」ことを最初から確認する。まだ読んでいない学生へは一読を要求する。

質問4: 授業のやり方

内訳: この授業の進め方・毎回まとめ文について、どう思うか?

説明: シラバスだけではなく、一回目の授業イントロダクションでは、この授業の進め方を詳細に説明する。従来の授業とは違って、この教育法の授業は以下の特徴があると説明する。まず、「固定観念を捨てる!」といった意識転換の説明である。以下6つの固定観念を意識転換させる。

1. 4回欠席しても、単位はまだいけるかなあ〜 (× 欠席ごとに10点減点。2回だけで危険)
2. 毎回出席すれば、単位は大丈夫かなあ〜 (× 基準を満たさないと、当回の得点がない)
3. 出席して、聴講しなくても大丈夫かなあ〜 (× 真面目に聴講しないと、課題提出が困難)
4. 携帯や私語、無断にしても大丈夫かなあ〜 (× 減点降格対象となり、成績に悪い影響)
5. 授業まとめ文提出すれば、大丈夫かなあ〜 (× 提出しても、低劣な内容なら不評する)
6. 期末レポート提出すれば、大丈夫かなあ〜 (× 自分なりの独自の内容だけを採点する)

授業の特徴も最初から説明する。

1. 本授業は毎回出席する必要がある。だが、出席の価値が十分ある。
2. 期末試験も小テストもない。毎回のまとめ文と期末レポートで評価する。
3. 毎回、面白いビデオがある。だが、見るだけではなく、討論時間と発言時間もある。知識が頭に入る正真正銘の双方向の授業。
4. 先生だけからの学びではなく、学生同士が互いに勉強できる仕組みである。
5. 「正解のない答え」の時は多いので、自・他の意見をはっきり知ろう。

また、以前の履修者の一部代表的な意見も提示して、正しい受講姿勢を整うことに寄与する。

1. 「五感に触れる画期的な授業」→ 充実な内容、効率的な進め方で知識と能力を身につける。
2. 「この授業を1つの企業とすると、CEOに李先生で社員が私たち生徒だとすると、社員に意見する場を与えて、それを共有し、すぐに実行する。優良企業だと思います。モチベーショ

- ンがとても高く維持できています」 → 一方的な授業ではなく、交流の場でもある。
3. 「いま4年生だがもっと早くこの授業に出会いたかった」 → 知識そのものだけではなく、知識を獲得する姿勢・態度と方法を学ぶ。
4. 「単位を取ることはとても大切ですが、この授業では、それだけのための授業ではないと私は強く思います」 → 単位と知識・能力を両立して楽しく取ろう。

まとめていくと、さらに以下の授業の特徴をも受講生に説得する。

1. 遣り甲斐のある授業 → そうか！これこそは大学らしい授業だ！（本当の授業を受ける）
2. 静かで受講できる環境 → 私語はほとんどない！（毎回、SA2名体制を取る）
3. 退屈ではない → 退屈の時間さえもない！（5つのモジュールで時間ごとに内容を区切る）
4. みんな一緒に互いに勉強する → 自力・他力、皆の力を感じよう！（教員×同士×自身の学び）

以上の説明の流れから、簡単な結論を受講生に提示する。

「安易に単位を取ろうと思えば、履修しないでください!」

「本気に単位を取ろうとすれば、毎回出席してください!」

こうするように、結局、授業の最初回から、真面目でない者に早くから意識転換を促すことで、受講者全員の正しい受講姿勢が整うようになった。

回答の結果から、この教育法の進め方に理解・賛同する学生の数は多いようである。表1の内容も分かるように、「向上心・雰囲気・生徒に飽きさせない進め方が素晴らしい」「他の授業と違い、毎回真剣に取り組む、集中しやすい」などの意見のほかに、「時間配分がわかるのでいいと思います」「自分の意見などが先生に伝えられるので良いと思う」「ビデオも興味深く、またディスカッションで他人の意見も聞けるので大変良いと思う」「座って話を聞くだけの授業では前回の内容とか忘れることが多いので、ディスカッションがあったり考える時間があるようなこの取り組みを他の授業でも取り入れてほしい」など、多数の意見またある。

示唆：受講生のやる気を引き出し、主体性・能動性を発揮させる新型教育法は大事である。従来のような一方通行的なやり方は受講生の不満を募り、多大な欠陥があり、改革・改善は要する。

質問5：学習計画

内訳：この授業の自分の学習計画：毎回真面目に出席？積極的に？適当に？

説明：正しい受講姿勢を実際の授業行動に移せるために、受講生の15回授業に対する学習計画を立てさせる。PDCA循環のP（Plan 計画）の段階を意識させる。

回答の結果からみると、ほぼ受講生全員が理解してくれたことは以下である。つまり、「毎回真

面目に出席すること、感想文（筆者注：去年から『授業まとめ文』に名称変更）を丁寧に作成すること、就活や自分将来のためによく頑張ること」が確認される。具体的に、表1が示された内容「毎回休まずに全授業に出席する」「前の日にしっかり寝る」「きちんと復習する」「余裕をもって期末レポートを作成する」などの意見のほかに、「質問する」「学ぶ内容を自分の考えと比較しながら学習したい」「教わるだけではなく自ら考える姿勢を大切にする」「インプットだけではなく、アウトプットできる機会があってよいと思います」「毎回出席したいです。どんどん積極的になれるように努力します」など、前向きな意見が多い。

示唆：事前にちゃんとした学習計画を意識させることは大事である。主体性をうまく発揮するため、最初の計画は、今後達成すべき目標や中間チェックポイントをより見えるかにする。

質問6. 要望や提案

内訳：この授業をより効率的・より有意義にするための考えはないか？

説明：教学一同が質の高いアクティブ・ラーニングをスムーズに運営させるため、一種の合意やコミットメントを結成し、同じ目標へ向けてともに働きかける。

回答の結果より、受講生より数多く積極的な意見が寄せられる。表1の内容はもちろん、以下のような内容もある。受講生の貴重な生の声なので、紙幅を惜しまなく、その一部を提示する。

「もっと前列に座らせてほしい」「後ろをできるだけあける」「人数を減らしてほしい」「VTRの音が少し大きい」「指定席では？」「少し厳しいと感じるがすべて生徒のためだ」「先生の授業はめちゃ効率的、やり方好きです。声も元気です」「まだ最初回だが、自分で学習しようとする意欲が出てきそうな気がします」「学生自身が考える時間が多く、能動的だと感じた」「毎回自分で考える時間があるなど、素晴らしいと感じた」「真面目な人が優遇されるので大変ありがたい」「時間を区切ってくださるので授業が受けやすい」「学んだことを振り返れるのでまとめ文には賛成です」「発言もできてよいと思う」「発言を増やしていく」「進め方も楽しく、面白い授業だと思った」「他の人にも李先生の授業の楽しさを伝えていってほしい」「意見交換が可能な場所」「議論の時間は不十分、もう少し長くしてほしい」「もう少しレジュメ・メモを取る時間をしてほしい」「議論は毎回同じグループの人ではなく、異なる人の意見を聞けるようにしてほしい」「何度か発言すると思いますが、評価や批判はお手やわらかにお願いします」「グループで話し合ったことを発表したらどうでしょうか」「ビデオの後の話し合いの時間がもう少しほしい、少し短く感じた」「時間を増やしていただき、友人の意見も聞きたいです」「発言機会の増加」「先生の個人的な意見も交えるとより楽しくなりそう」「穴埋めのプリントをする際にスピードが少し速い」「スペースが少し狭い」「ビデオの多用・もっと見せる」「集中を保てるよう毎回少しの変化」「タイムリーな情報をしてほしい」「ビデオの最中に先生がしゃべるとき一度ビデオを止めるほしい」「前の電気をもっと消してほしい」「マイクの音が小さい」「レポートの配点が多すぎるじゃないか」「授業の厳

しさと難しさを感じるが有意義な知識が学べる・楽しめる」「4回生なので就活の結果や案内のメールを携帯で少し使いたい」「各会社の経営理念・経営戦略を紹介してほしい」

以上のように、この教育法では、従来の一般的な授業によく見られる、「90分が長い、退屈、つまらない」などのマイナス・イメージとは全く無縁のようである。むしろ逆に、「ビデオの時間、もっとほしい」、「討論の時間、もっとほしい」、「まとめ文の時間、もっとほしい」など、ほとんどの区切りでは時間が足りない感じになる。いったいなぜなのか？何が起きたのだろうか？不思議までも思わないだろうか。これはすべて教学双方による意識変革こそがもたらした激変だろう。

以上、一回目の授業アンケートから受講生の様々な履修動機や要望があると分かる。より具体的に簡単に、学生のニーズをまとめようとする、以下のようになるのではないと思われる。

1. 単位。2. 時間の都合。3. 友達と一緒に履修できるか。4. 楽に取れるか（期末試験や小テストがあるのか。出席が必要なのか。教室の規律が厳しいなのか。遅刻・欠席・私語・携帯など不正行為の対応がどうだろうか）。5. 知識・能力などの自己成長。6. 面白さ。7. 自分の学習タイプに合うか。8. 評判・口コミ。

そのうち、一番大事な関心事は4番ではないかと思う。つまり、気軽にこの授業を履修できるかどうか、単位を楽に取れるかどうかなど、への関心は非常に大きいようである。

以上8つのことが学生の真のニーズだとすれば、我々教育側はまず意識転換をしたうえ、日々の教育の現場で精力的に対応を図ってからこそ、学生的心を掴む教育を実現できるかと思う。

Ⅲ. 「ファイブ・モジュール教育法」：独自のアクティブ・ラーニング教育法の開発

学生のニーズを把握した後、次の課題は「どうやって学生的心を掴むか」ということになる。

まず、恐らく雰囲気いい学びの場を作ることは大事だろう。教室の規律を整うためには教員の毅然たる対応が必要である。教員の役割は非常に大きい。

そして、様々な工夫が必要になるだろう。一方的な講義スタイルはもう限界を迎えている。従来の「受け身的、受動的、静かな『説教的』、消極的、無関心、漠然、勝手に、単位優先、卒業優先、『教員の自己満足的』」などのマイナス・イメージから抜け出す必要がある。

学生の能動性や主体性を喚起すべきである。「もっと知りたい、もっと調べたい、ビデオをもっと見たい、ディスカッションの時間をもっと増やしたい」などプラス・イメージを付け加えたアクティブ・ラーニング教育への変革が必要である。

これに関して、本論文では、「毎回の授業で自己成長が確実に実感できる、一発勝負ではなく毎回授業の積み重ねこそが大事、学習は習慣になるべきなので一回でも欠席したら知識が逃げる損になる意識、単に単位を楽に取るのではなく学びの楽しさを感じる」など、あるべき理想像を目

指して具現化する。つまり、アクティブ・ラーニング教育は学生の自らの思考を促し能動的な学習のはずであり、大学らしい授業を取り戻せ、当たり前のことを当たり前にするべきであると思う。

本学はすでに 2015 年度から学生の主観能動性を発揮するような気づきの教育プログラムを導入した。これからの第三次計画の中では、「理論より論理：論理的思考力を育てる」「知識を知恵に変える力、考える力を育てる」「想像力を育てる」、「コミュニケーション力を育てる」など、まるで校是である「ネアカ のびのび へこたれず」を継承するように、新時代におけるアクティブ・ラーニング教育をも要請している。従来まで重視された「暗記・再生の力」から「考える力、論理的思考力、創造力、自主・自立、思考力、協調性、判断力」への転換・変革が必要になり、「豊かな社会の実現に貢献できる意欲と能力を持ったビジネスパーソン」学生像の育成することを目標している。それと連動する形で、教職員の評価制度の見直した教育改革も当然必要あると思われる。

本論文はこれらの問題意識に従い、以下のような独自のアクティブ・ラーニング教育法の開発を考える。

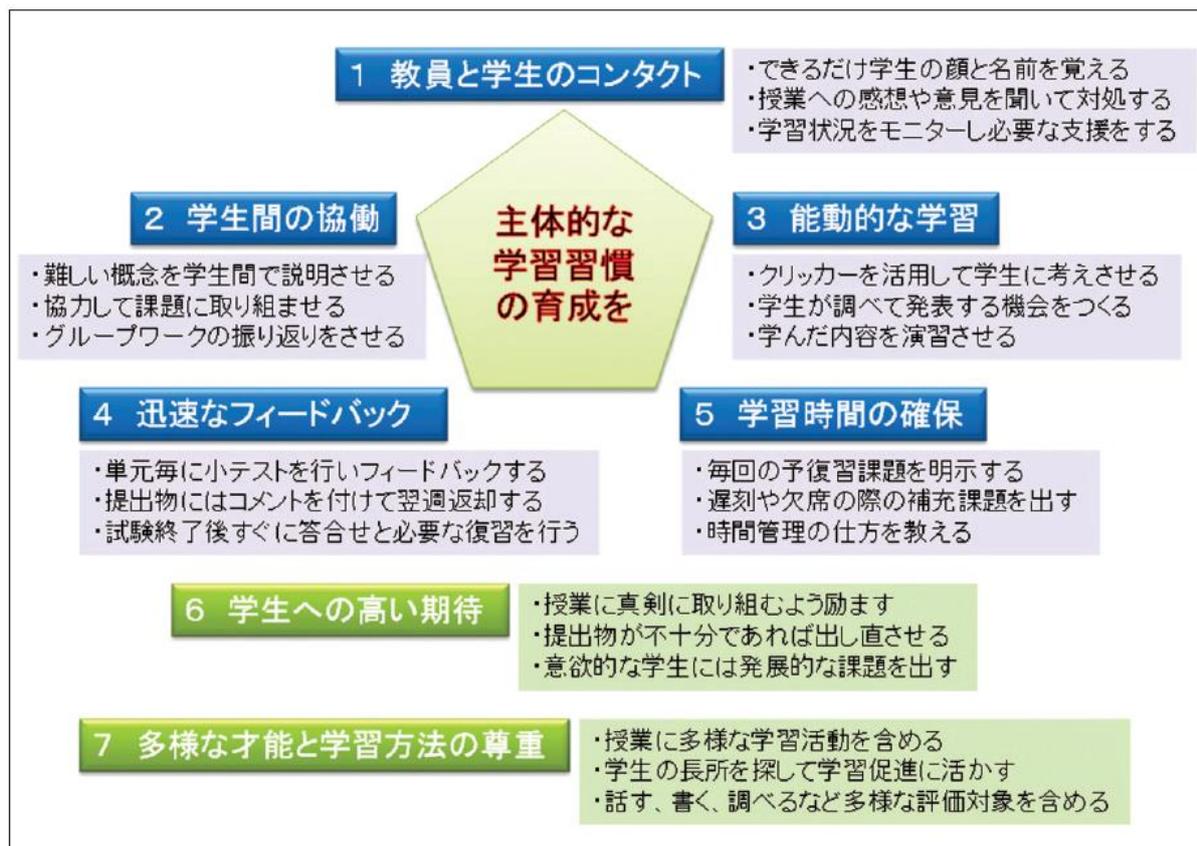
まず、アクティブ・ラーニング教育法の原点と呼ばれる「7つの原則」に辿ってみる。図1からも分かるように、7つの原則の内訳では、それぞれ3点ほどの実施細則も具現化できる。これらの実施細則を本論文での教育法改革に適用してみると、表2のように「7つの原則」に関する本教育法のチェックポイントの表は表記できる。

また、PDCAの学習サイクルの原理をも導入し、毎回授業の90分を効率よく使う5つのモジュールからなるアクティブ・ラーニング教育法を考案し、図2「ファイブ・モジュール教育法」と呼ぶような本論文の教育法を形成する。

この教育法の考えは以下である。つまり、毎回90分の授業を5つの内容(モジュール)と区切りに分けて、決まった時間内に決まった内容をする。事前に学生へも周知し、了解を得る。

効率的で楽しく頑張る毎回授業の時間割をPDCAサイクルで学生に実感させる。すべてのモジュールでは、せいぜい30分を限度に²⁾区切ることで、常に学生の集中力を保ち、質の高い授業を実現する。

図1 教育の7つの原則



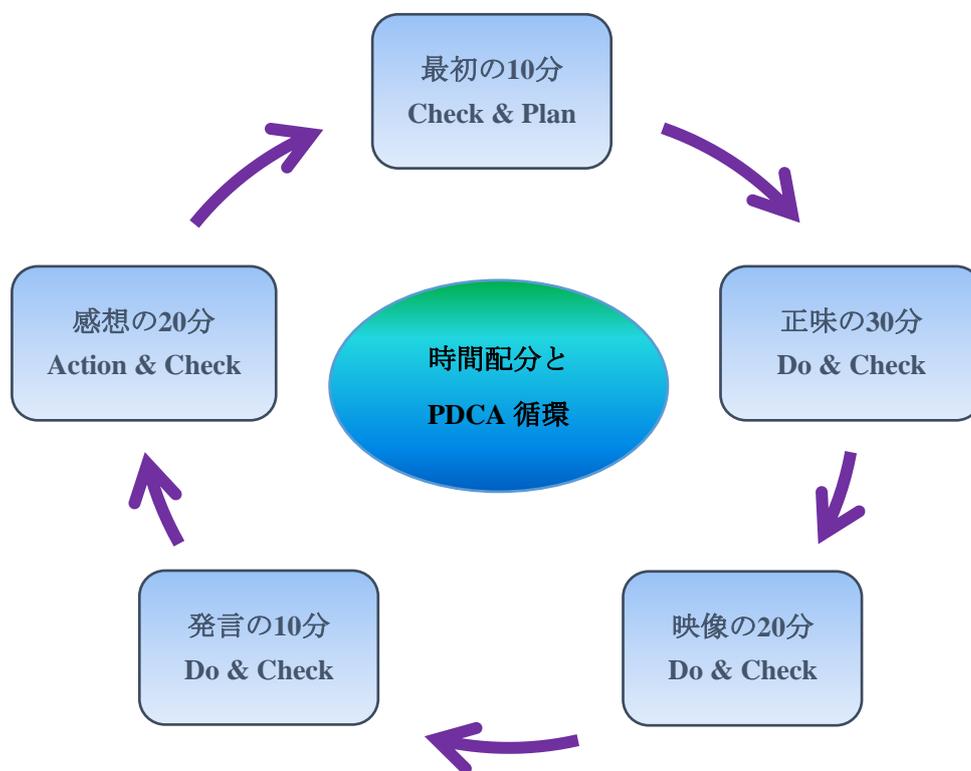
出所：山地（2014）p.4 図2 「7つの原則」とそれぞれの工夫例。

表2 「7つの原則」に関する本教育法のチェックポイント

番号	アクティブ・ラーニングの7つの学習習慣のチェックリスト	採択	代替	一言の説明	
1	教員と学生のコンタクト	できるだけ学生の顔と名前を覚える。	○	/	多人数だが、そうする。
		授業への感想や意見を聞いて対処する。	○	/	毎回意見や提案を聞く。
		学習状況をモニターし必要な支援をする。	○	/	質量、難易度、理解度を毎回チェック。
2	学生間の協働	難しい概念を学生間で説明させる。	×	○	討論・調べの時間を用意する。
		協力して課題に取り組みさせる。	×	×	グループ・ワークではない形。
		グループワークの振り返りをさせる。	×	×	グループ・ワークではない形。
3	能動的な学習	クリッカーを活用して学生に考えさせる。	×	×	今後導入を検討する。
		学生が調べて発表する機会を作る。	○	/	討論・調べの時間を用意する。
		学んだ内容を演習させる。	×	○	昇格で発言を促す。
4	迅速なフィードバック	単元毎に小テストを行いフィードバックする。	○	/	毎回まとめ文と評価(次回)を実施する。
		提出物にはコメントを付けて翌週返却する。	○	/	毎回代表的な見本を掲示する。
		試験終了後すぐに答合せと必要な復習を行う。	×	×	試験ないので該当なし。
5	学習時間の確保	毎回の予復習課題を明示する。	○	/	事前予習、事後復習。
		遅刻や欠席の際の補充課題を出す。	×	×	遅刻は10分を限度。10分超えると降格する。
		時間管理の仕方を教える。	○	/	毎回決まった時間に決まったことをする。
6	学生への高い期待	授業に真剣に取り組むよう励ます。	○	/	A+や「よくできました！」の励まし。
		提出物が不十分であれば出し直させる。	×	○	点評と良い見本、呼び出し、改善をする。
		意欲的な学生に発展的な課題を出す。	×	○	ゼミ募集を宣伝する。
7	多様な才能と学習方法の尊重	授業に多様な学習活動を含める。	○	/	自他啓発、ビデオ、三方良しの方法。
		学生の長所を探して学習促進に活かす。	○	/	日本語教室、まとめ力、深い洞察力。
		話す、書く、調べるなど多様な評価対象を含める。	○	/	毎回聞く、見る、調べる、話すを実施する。

出所：山地（2014）p.4 図2 より筆者作成。

図2 「ファイブ・モジュール教育法」のイメージ図



出所：筆者作成。

具体的に、「ファイブ・モジュール教育法」は以下のモジュールから構成される。

モジュール1．最初の10分：Check & Plan！

前回の振り返りと説明の時間である。注意事項、前回の補遺・訂正・復習もあれば、前回の出席率、改善してほしい見本をも含め、特に優秀な見本を確認して共有する。受講者のモチベーションを維持し高めて、常にやる気を引き出すのに役立つと思う。学生が各自で前回、どれほど達成したのかを確認（Check）、優秀な見本を見て、これからどうすべきかを計画する（Plan）。コメント・点評を加えたまとめ文の共有により、学生同士による互いに学びあう学習が可能にあると思う。また、学生のニーズや要望を毎回ダイナミック的に確認できる。このモジュールの区切りは教員と学生との間における大事な「対話」の場にもなるので、非常に大事だと思われる。

モジュール2．正味の30分：Do & Check！

今回の講義内容をレジюмеとともに教員による説明で進む。学生は事前に RYUKAPortal からダウンロードしたレジюмеを教室までに持ち込み、教員の説明を聞きながらレジюмеにある穴埋め

を確認して記入する。穴埋めは学生の集中を促す措置であり、原則一頁に2、3個所に設定する。学生は教室のプロジェクターに映すPPTのスライドを確認しながら穴埋めを記入し、まるで自分オリジナルなレジュメ資料を完成する気持ちである。ここでは、重要なのは学生の記入時間を用意する。学生が記入完了してから、教員は解説を加える方が理解されやすいだろう。このモジュールは実行(Do)と確認(Check)の段階だと思う。教員側からの「伝道・授業・解惑」の過程である。ファイブ・モジュールの中に一番長く、つらい時間かもしれないが、30分の集中力が限界に迎える途端に、すぐ次の区切りに切り替えるので、下げようとする集中力をまた引き上げてピークへ迎えさせる。

モジュール3. 映像の20分: Do & Check !

毎回の授業内容にかかわる身近で面白いビデオを用意する。ただ、単なる見るだけではなく、後ほど提出課題もあるので、学生は自然に集中して考えながら見る。現実の企業経営や経営者に関する身近で分かりやすいビデオなので、堅苦しい抵抗感はなく興味津々に見てもらう工夫が必要である。視聴環境に関しては、温度の調節やカーテン下し、電気の全滅(発熱電球のみ点灯)または教室の中間部分のみの点灯などの工夫で十分に区切りを意識させる。まるで映画館のような感じでビデオを視聴させる。提出課題として、ビデオの部分ではキーワードやキーポイントを見出す必要があるので、毎回ほぼ全員が集中してビデオを見るのは確実である。このモジュールは実行(Do)と確認(Check)の段階だと思う。ビデオからの学習、実践への運用とも言える。

モジュール4. 討論の10分: Do & Check !

この部分では、「他人からの学び」の段階である。自由討論3分、5人による発言7分の時間からなる。学んだ知識とビデオの内容をどれだけ理解しているかをチェックし、他人の前にはっきり意見を表明する能力と自信をも養成するため、学生による気軽な発言を促す。基本的に発表内容の質に関係なく、一律昇格・加点で奨励をする。こうして、教員の一方的な説教ではなく、学生が自分考えた内容を発言したり、他の学生同士の発言を聞いたりすることにより、短い時間内でもできるだけ多くの多方向的な知的な刺激を受けさせ、能動的に授業に参加させる。このモジュールも実行(Do)と確認(Check)の段階ではないかと思う。

モジュール5. 感想の20分: Action & Check !

知識と思考をより深く頭に入れるため、口頭だけでは足りない。毎回、書面の形でまとめ文を書かせて、学生の文章力・まとめ力を訓練する。限られた20分で200字以上のまとめ文を完成させる³⁾。授業まとめ文では、具体的に3つの内容を書かせてもらう。つまり、I. 講義内容のまとめ(今回のレジュメと教員が説明した内容、30分の正味時間の内容)、II. VTR内容のまとめ

(ビデオのキーポイントとなる内容のまとめ)、Ⅲ. 自分独自の感想と総括(自分ではない内容は不評する。意見、要望、提案も可能)、の3つの内容である。毎回の授業で積み重ねた練習の結果、知識と能力が自然に向上し、身につくことは可能になると考えられる。毎回、時間管理の大事さをも理解してもらおう。

次回、教員が評価・コメントをつけた代表的な見本を全員へ見せる。また、A+、A、B、C、Dといった5ランクで全員の授業まとめ文の質を判定する。出席状況とともに、この判定結果をも全員へ授業のときだけに公開する。ただ、プライバシーを守るため、氏名を隠した学生番号を分かる情報だけを公開する。学生が放課後、各自確認することができる。必要の時呼び出しもする。

以上からも分かるように、毎回の授業では、Pが1回、Dが3回、Cが5回、Aが1回、それぞれあり、PDCAサイクルを回している。適当な区切りをも設けているので、このPDCAの複数反復することは授業の毎回分だけではなく、15回分の全授業でも効率的な授業効果が期待できる。

以下、この「ファイブ・モジュール教育法」の実施効果に関して分析を行う。

Ⅳ. 「ファイブ・モジュール教育法」: 独自のアクティブ・ラーニング教育法の 実施

この教育法の実施によりどれだけ学生の勉学意識や授業の質が改善されたのかを把握するため、授業の第10回目ぐらいの時、中間アンケートを実施する。実施内容は、以下のような学習の4段階のことを学生に説明し、一回目時の段階と十回目時の段階をそれぞれ1から4を選んでもらう。

(1) 段階1: 「I'm forced to study」私は勉強に強いられる。勉学意識が低い段階。

想定する理由: 出席しないと、単位取れないから。出欠が取るから。

(2) 段階2: 「I want to study」私は勉強したい。勉学意識がやや高い段階。

想定する理由: この授業は面白い、授業内容に対して、もっと知りたい。

(3) 段階3: 「I love to study」私は勉強が好きになる。勉学意識が高い段階。

想定する理由: 遣り甲斐を感じるので、自己意思で資料を収集したり勉強したりをする。

(4) 段階4: 「I can study」私はうまく勉強できる! 勉学意識が非常に高い段階。

想定する理由: いつでもどこでも主体的に効率よく勉強できる。

全体の結果からみると、基本的に学習の意識が高くなっている。すべての授業アンケートに関しては、2つのサンプルの数列(一回目と十回目)の間の差にきわめて高い統計的な有意性は存在する($1E^{-18}$ 以下)。つまり、十回目の数列は一回目の数列よりほぼ完全に数値が高い。以下、中間アンケート分析その1: 定量的な結果及び分析、中間アンケート分析その2: 定性的な回答情報の一部概要及び、中間アンケート分析その3: 定性的な一部回答情報の分類分析といった3つ

の分析を行う。

中間アンケート分析その1：定量的な結果及び分析。

1. 「国際経営論」の結果分析：履修者数180名、有効人数136名。

(1) から (2) へアップした人数と比率は 49 名・36.0%で一番多い。二番多いのは (1) から (3) へアップした 26 名・19.1%である。三番多いのは (2) から (3) へアップした 19 名・14%である。四番多いのは (1) から (1) へ (つまり意識がまったく変わらなかったタイプ。以下同) の 14 名・10.3%である。

表3 2016年度後期国際経営論180人 中期アンケート

	九回目 (1)	九回目 (2)	九回目 (3)	九回目 (4)	小計
一回目 (1)	14	49	26	2	91
一回目 (2)	5	9	19	3	36
一回目 (3)		1	2	1	4
一回目 (4)		1		4	5
小計	19	60	47	10	136

注1：記入部数139、有効部数136。出席有効率75.6%。

注2：学習意識がアップしたのは囲む数字のあるセル：計100人・73.5%である。何も変化しなかったのは対角線にあるセル：29人・21.3%である。ダウンしたのは下線が引かれるセル：7人・5.1%である。

2. 「経営学入門」の結果分析：履修者数271名、有効人数172名。

(1) から (2) へアップした人数と比率は 81 名・47.1%で一番多い。二番多いのは (1) から (3) へアップした 32 名・18.6%である。三番多いのは (2) から (3) へアップした 17 名・9.9%である。四番多いのは (1) から (1) への 16 名・9.3%である。

表4 2016年度後期経営学入門271人 中期アンケート

	11回目 (1)	11回目 (2)	11回目 (3)	11回目 (4)	小計
一回目 (1)	16	81	32	5	134
一回目 (2)	3	7	17	3	30
一回目 (3)		3	3		6
一回目 (4)		1		1	2
小計	19	92	52	9	172

注1：記入部数174、有効部数172。出席有効率63.5%。

注2：学習意識がアップしたのは囲む数字のあるセル：計138人・80.2%である。何も変化しなかったのは対角線にあるセル：27人・15.7%である。ダウンしたのは下線が引かれるセル：7人・4.1%である。

3. 「経営戦略論」結果分析：履修者数229名、有効人数189名。

(1) から (2) へアップした人数と比率は90名・47.6%で一番多い。二番多いのは(1) から (3) へアップした43名・22.8%である。三番多いのは(1) から (1) の19名・10.1%である。四番多いのは(2) から (3) への17名・9.0%である。

表5 2016年度前期経営戦略論I 229人 中期アンケート

	十回目 (1)	十回目 (2)	十回目 (3)	十回目 (4)	小計
一回目 (1)	19	90	43	2	154
一回目 (2)	3	9	17	3	32
一回目 (3)		2	1		3
一回目 (4)					0
小計	22	101	61	5	189

注1：記入部数192、有効部数189。出席有効率82.5%。

注2：学習意識がアップしたのは囲む数字のあるセル：計155人・82.0%である。何も変化しなかったのは対角線にあるセル：29人・15.3%である。ダウンしたのは下線が引かれるセル：5人・2.6%である。

4. 「企業倫理論」結果分析：履修者数187名、有効人数157名。

(1) から (2) へアップした人数と比率は83名・44.4%で一番多い。二番多いのは(1) から (3) へアップした33名・17.6%である。三番多いのは(2) から (3) の15名・8.0%である。四番多いのは(1) から (1) の14名・7.5%である。

表 6 2016 年度前期企業倫理論 187 人 中期アンケート

	十回目 (1)	十回目 (2)	十回目 (3)	十回目 (4)	小計
一回目 (1)	14	83	33	3	133
一回目 (2)		6	15	3	24
一回目 (3)					0
一回目 (4)					0
小計	14	89	48	6	157

注 1：記入部数 158、有効部数 157。出席有効率 84.0%。

注 2：学習意識がアップしたのは囲む数字のあるセル：計 137 人・87.3%である。何も変化しなかったのは対角線にあるセル：20 人・12.7%である。ダウンしたのは下線が引かれるセル：0 人・0%である。

5. 2016 年度 4 授業の総合結果分析：履修者数合計 867 名、有効人数合計 654 名。

(1) から (2) へアップした人数と比率は 303 名・46.3%で一番多い。二番多いのは (1) から (3) へアップした 134 名・20.5%である。三番多いのは (2) から (3) の 68 名・10.4%である。四番多いのは (1) から (1) の 63 名・9.6%である。

表 7 2016 年度 4 授業の総合結果 867 人 中期アンケート

	十回目 (1)	十回目 (2)	十回目 (3)	十回目 (4)	小計
一回目 (1)	63	303	134	12	512
一回目 (2)	11	31	68	12	122
一回目 (3)		6	6	1	13
一回目 (4)		2		5	7
小計	74	342	208	30	654

注 1：記入部数 663、有効部数 654。出席有効率 75.4%。

注 2：学習意識がアップしたのは囲む数字のあるセル：計 518 人・79.2%である。何も変化しなかったのは対角線にあるセル：105 人・16.1%である。ダウンしたのは下線が引かれるセル：19 人・2.9%である。

中間アンケート分析その 2：定性的な回答情報の一部概要。

以下全部はアンケートから貴重な学生の生声の一部である。

表 8 中間アンケート一部概要

時期	代表的な4つの回答(筆者注付け)	
一回目の初期所属段階及びそれに対する自分なりの理由	回答1: (1) 空欄	(筆者注:平日非常に真面目でほぼ毎回A+の優秀な成績を取る一学生) シラバスを閲覧した際は、正直書いてある内容にうさんくささを感じていましたが、講義内容は非常に興味深いので、実際に受けてとても面白い講義だったので、続けて受けてことにした。
	回答2: (1) (1)	(筆者注:多くの並みの学生の受講意識と行動を代表できるかと思う) 勉強に強いられているという低い意識で、1回目をいきなり休んでしまった。3年になって、疲れたという勝手な理由で休んでしまったから。
	回答3: (1) (2)	(筆者注:去年より、受講意識が大きく変化してきた非常に真面目の一学生) 以前、経営学入門の単位を落としてしまい、再履修で受けるため、勉強楽しみ!という気持ちよりは単位をなにかがあっても取らなければならない!という気持ちが大きく、必然的に1の気持ちが大きかったと思います。互いに勉強しよう!というキャッチフレーズに初めて魅力を感じました。
	回答4: (1) 空欄	(筆者注:不安や漠然など、一部の学生の受講意識を反映しているかと思う) とりあえず、出席すればいいかなという考えでした。
10回目の中間所属段階及びそれに対する自分なりの理由	回答1: (2) (3)	(筆者注:人間は誰でも向上心あるので、褒められると、やる気が噴出する可能性) 自分が書いた感想文があそまで評価されるのは人生で初めてだった。李先生にもっと評価してほしいと願う。今までの授業では考えられないほどメモを取り、また長く感想文を書いた。
	回答2: (3) (4)	(筆者注:静かで一方的な説教型授業ではなく、臨場感溢れる参加型授業効果) マイクル・サンデルのハーバード白熱教室を受けた時に、こんなに命を元に1000くらいの人達全員で授業を受けているのをみたら、授業ってこんなにも人を引きよせるかがあるんだと思い、自分がそこに参加したら、どういった意見を出すだろう、他の生徒の意見にどう対応するだろうととても考えることができた。
	回答3: (4) (4)	(筆者注:敗者意識から取り戻せ、再び自信を受講者へ持たせる。「Yes, I can!」で見事に復活する可能性) 今ではこの授業が楽しいです。たのしいけれど、私は勉強ができる!と自信をもっていえるくらい。頭がいいわけではないですが、私の中で李先生の授業は、自分が頑張っただけ評価につながるの、楽しさと、やりがいと、能力を同時に身に付けることができるので私は4です。
	回答4: (2) (4)	(筆者注:受講者の学力に相応しい授業内容と共に、ビデオで「楽しく頑張れる」を工夫) この授業をなめていました。毎回のビデオはおもしろいし、もっと知りたい!見たい!といつも思います。レジュメの内容もとても分かりやすいので、経営のかたくなるしいイメージがいきにくくなりました。
自由意見・提案・要望	回答1	記入なし。
	回答2	記入なし。
	回答3	(筆者注:真面目に受講する学生に教員が公正・公平の評価を下すのは非常に大事。普通の授業では殆どこのような本音を洩れる機会は少ないかと思う) 人がかなり減ってとてもうれしい。VTRの時に、寝てる人、どうやってまとめ文を書いているのが謎。楽しんで単位を取る人はみんな落ちてほしい。ちこくも。今日もお疲れ様です。
	回答4	(筆者注:適切な教育方法で受講者の勉学意欲を引き出し、達成感を実感させる) もっとビデオがみたいです!でもこの授業を履修して本当に良かったと思っています。楽しいです。

出所: 2016年度前期「経営戦略論」と「企業倫理論」及び、後期「国際経営論」と「経営学入門」の中間授業アンケート調査よりそれぞれ1部ずつ回答を抽出して筆者作成。他の詳細情報は以下の中間アンケート分析その3の内容を参照されたい。

注: 一回目と十回目にそれぞれ2つの選択欄がある。

中間アンケート分析その3：定性的な一部回答情報の分類分析。

まず、一回目の理由を以下の6つに分類する。つまり、先輩などの推薦、単位志向、楽しい授業への期待又は最初から高い受講意識、以前授業を受けた経験者、不安・心配・漠然、勉強が嫌い、である。ここでの定性分析は主に受講生の心理を分析することに主眼を置く。

一回目の時の所属段階の自分なりの理由：

1. 先輩などの推薦：学習支援センターや、先輩、知人・友達による勧めは多いようである。

「この授業を受けるきっかけは先輩たちのおすすめです。最初の授業を受けた後、やはり先輩たちの言う通り、先生の説明が分かりやすいし、内容も面白いだと思います。そのため、この授業を好きになりました。もっと知識を知りたいと思います。」

「李先生の授業はおもしろいときいていた。」

「以前に李先生の授業を受けてとてもおもしろかったので、受講しました。どの回にも必ず1つの疑問点を持つので、自宅で資料やインターネットで調べて解決していました。だから楽しんで勉強をしていました。(筆者注：非常に望ましい回答だと思う。学習意欲が改善された一事例)」

2. 単位志向：数多くの学生は最初この意識で授業に臨んだ。別の授業とも共通するかと思う。

「出席して単位を取得する事に意識が向いていた。レポート作成も苦手で履修する科目を間違えてしまったと後悔するなど気持ちとしては中途半端でやる気もなくなっていました。」

「最初はどのような授業かわからず、自分がなにをして良いかわからなかった。そのため単位をとることだけを考えていた。」

「テストがなく、レポートをがんばれば、単位をもらえると思っていた。」

「単位が少なく焦りがある。とりあえず単位がほしいという考えしかない。李先生の授業が卒業には必要な科目なので履修した。(ただし授業は個人的に好きなので履修した)」

「試験がないと、もし毎回にきちんと出席すると単位をとれると思いました。」

「取らなければならないから仕方なくがんばろうと思っていた。実際めんどうくさいやしんどいなと思った。単位のことだけを考えていた。」

「単位さえ取れば良いと思っていた。大学も高校のようにどうにかなると思っていた。」

「商学部であるのではじめは特に「必修だから」という気持ちが強かった。」

「最初は、正直単位があれば良い。学生だから一応勉強しようなどあまり学習をする意欲が無かった。そのときは、少しだけ経営学を知りたかったので履修しようという考え。」

「1年生の時に経営学入門を受講したが単位を落としてしまい、絶対単位を、今度こそ取らなければ!!という気持ちが大きく、1または2でのスタートをしてしまいました。」

「木曜日に書いたように多くの単位の為です。その時は全く勉強する気がない。一番後ろの席で座わる。」

「始めに、経営学に興味がありません。早く単位を取って、早く卒業したいです。でも毎回、先生は真面目に教えています。授業内容の興味を感じています。そして、いろいろなことを感じます。好感があります。」

3. 楽しい授業への期待又は最初から高い受講意識：勉学意欲が高い一部の学生は最初から授業への高い期待がある。だが今の段階このような学生は数少ないので、今後さらに増えてほしい。

「最初はどうな授業なのか不安だったが、先生が授業でビデオを見たりすると聞いて非常に楽しみにになりました。そしてもっと先生の授業を受けたいと思った。」

「先生の授業がすごく面白くていつも楽しみで来ていた。もっといろいろなことを知りたい、勉強したいと思いながら、楽しく授業を受けていた。」

「毎回、テスト気分でということいい成績を取るためにモチベーションが上がる。一回目からおもしろい授業だと思った。」

「初回だから、流れか内容もわかっていなかったから。経営というものにもともと興味があったから、入門を履修しようと考えていた。」

「月曜日の1限ということで朝、早起きが苦手な私にとっては非常につらかったため。履修の関係で一年時に入門を履修できなかったが、既に組織論、戦略論、管理論を履修して入門以上の内容を勉強したため（筆者注：『私の別の授業をまた履修してみませんか。企業倫理論、国際経営論、経営戦略論もあるよ』と次回の時に全員の前、返事した）。」

「将来、企業を考えているので、役立つ情報を得るために選択した授業です。授業に内容が豊富で、ビデオを毎回面白いです。」

「今取っている講義の中で最もわかりやすく、最も自分に適した講義であったために、もっと知りたいという発想に変わった。」

4. 以前授業を受けた経験者：特に3年生と4年生以上の学生は筆者の別の授業を受けたことがあり自己の成長を実感したうえ、この教育方法を賛同するので、また今回も履修してもらった。

「私は現在4回生で李先生の授業を何度か受けたことがあり先生の授業が面白いと知っていたため受講した。」

「いつからが分からない、いつも授業に関して勉強したいです。」

「前期に先生の授業を受けておもしろかったので、今回は主体性をもって初回から授業を受けました（筆者注：「能動的」「主動的」を強調するアクティブ・ラーニング教育の具現化だと思う）。」

「前期に李先生の授業を受けてみて、時間配分がよく、退屈しない授業だったので、今回も履修しました。やはり、毎回評価が目に見えるので日に日にやる気になると思いました。」

5. 不安・心配・漠然：新しい教育法なので、馴染みのない受講者は心配などの声が多い。

「最初の授業では、降格の恐れがあるという説明を受けたので、非常に心配であった。しかし、先生のレジュメには、穴埋め体験があったからよいスタートができた。」

「とりあえず、出席すればいいかなという考えでした。」

「大学の講義は似ているものが多いなと感じていました。なので、出席さえしていれば、授業内容は同じようなことを他で聞けるかもしれないし、単位を取れたらそれでいいと思っていました。」

「1年生として大学の授業がどういったものか、また経営とはなにか知らない状態で履修したため。」

「初めは厳しそうな先生だなあと感じていました。2回無断欠席で落単と聞いて、大変な授業だなあと焦りました。」

「授業の方針を聞いて、必ず出席をしないというような使命感がありました。とりあえず行っとならば大丈夫だろうという精神でした。」

6. 勉強が嫌い：一部の学生はもともと学力が低いので、勉強に対して従来から抵抗感が高い。

「単位が取りやすくて、後期も単位をとりやすそうな授業を中心に選んでいた。もともと授業自体にやる気がなかった。勉強が嫌い。」

「勉強は嫌いだが、この授業はしっかり出席し、毎回のレポートを書かないと単位が取れないから。」

「昔から勉強がキライでとても自分から学びたいと思えず、経営学部だからとっておこうという気持ちで受けたので。」

「正直めちゃくちゃめんどくさい講義だと思った。辞退しようとも思ったが、毎回VTRなどもあって、座学ばかりではないから、とりあえずやれるところまでやろうと思っていた。」

「ほかの授業と比べて、学んだことは山ほど多いと思う。」

「自分のためになる。日々成長しています」

十回目の時の所属段階の自分なりの理由：

1. 大幅な意識転換：非常に明らかな変化を自覚した学生は80%（表7）比率で圧倒的な過半数である。もうすでに受講することは苦しいことではなく習慣や楽しみが変わってきた声は多い。

「私は今日までの出席率は100%です。授業中は、先生のお話を聞きながら、プリントを記入して、重要なところは二重線をマークします。私だけではなく、皆さんのご協力のため、良い雰囲気の良い教室になりました。そうしたら、私たちは全力で勉強することができます。たくさんの知識を身に付けました。」（筆者注：100%皆勤ほど多くないが、大幅な意識転換をした学生は数多い）

「講義の数が増える内にこの講義が難しい、理解できないという根拠のない先入観が無くなり、講義内容が頭に入りやすくなった。レポート作成を通じて企業倫理論について勉強したいと思えるようになった。」

「3年前期にとった李先生の授業よりも分かりやすく、授業のシステムも少し改善されていたので毎回やりがいを感じる。受講していて自然と知識が身に付く。」

「この授業は生徒が作り上げていく授業だと思う。一人の生徒の頑張りが皆の学習につながる。」

「本当に面白くて、すごく勉強が好きになりました。本当に感謝しています。後、李先生に名前を覚えて頂いていることすごくうれしいです。」

(筆者注:もともとはあまり真面目ではなくいつも教室の最後列に座っていた一学生だったが、去年から筆者の別の授業を履修した際、筆者は授業に集中するように注意を呼びかけ、名前の発音を聞いて確認して、その後、学習態度が一変して、真面目に受講するようになった。ここで一つの示唆を指摘しておきたいのは、人間を含めすべての動物は「自分は無意味の符号(例えばチンパンジーA)や数字(例えば学生番号)ではなく、より具体的でこの世の唯一的な存在であることと認めてほしい」といった性質があると思う。これに関する科学研究も多いと思う。)

「今ではこれまでのこの授業を通じて、新たな知識がたくさん得られるし、ビデオなどさらに深めることのできる楽しい授業だと思っている。」

「李先生の授業を受けていくことにより毎回の授業がとても楽しくまた、わかりやすい授業によって回を重ねるごとにこの授業が楽しみになったため。」

「毎週の木曜日は李先生の授業を受けることが習慣になったと思います。」

「もともと経営学に興味があり、この授業は本当に自分の為になることが多いので、今は自己意思で授業に出席しているから。」

「いつもの授業ではただ先生の話聞くだけでたいくつだけれど、この授業は紙を書いたり発表をしたりと、自分の意見を伝えることができる。」

「この授業を受け始めてから、マーケティングのことに興味を持てました。VTRのチョイスもよくて、いつも飽きることなく授業を受けることができました。裏:毎回、授業があつという間に終わるので、授業のやり方がとても上手なんだと思った。あと残りの授業もしっかり授業を聞きたいと思う。」

「ただ単に授業に出て、聞くだけではなくになりました。自ら自分を囲む企業の経営戦略などに深く関心を持つようになり、この分野において、もっと知識を増やしたいと思った。」

「この講義はやればやるだけ身につく内容なので、予習復習も積極的に取り組みもとうまい勉強法をもさくしている。そして前回次の講義が気になるような内容なので出席せずにはいないと感じた。」

「授業が小まとめを書くので、毎回授業の前に予習します。資料がみていろいろなことは自分

を考えるができます。そして、自信があります。授業の時、真剣になります。」

2. 毎回評価でモチベーションを上げる：毎回の授業で、全員の成績も含め前回の評価、一部の受講者に対して、「よくできました！」の励みのひとこと、改善してほしい教員のコメントや特筆に値するポイントなど、10本ほどの代表的な見本を全員へ見せて、やる気を持続的に維持する。

「この授業を受けていくうちに、まとめ文を書くのが楽しくなってきました。きちんと講義を聞き、まとめ文を提出すると、先生から毎回評価をいただける。それが自分のモチベーションアップにもつながり、次回へのやる気にもつながっていきました。」

「レポート課題をしているだけで、それなりの評価をもらえている。」

「実際に李先生の授業を受けると、よかったですと思います。以前のだらだらな態度がなくなりました。1時間半の時間はたくさん知識をもらえます。」

「最初は単位目的でこの授業をとっていた。今は毎回の授業に出るのが楽しい。時間配分も分けられていて、気分が転換できる。努力をすればよい結果が返ってくる。」

「毎回の授業で評価してもらえるからとてもやる気が出る。」

「まじめに勉強してA+をもらって、自信がいっぱい。→この授業をも好きになる」

「がんばった分だけ、真面目に取り組んだ分だけ、結果が自分に身につくこの授業は私にあっており、なおかつこれほど積極的に授業に耳を傾けられる授業はない。自信を持って4を選びます。」（筆者注：非常に真面目な一学生。）

「自分は文でまとめるようなもの（レポートなど）がとても苦手で、短時間では、出来ないことが多かったが、この授業を受けて分かったことがある。それは、自分が勝手に苦手意識を持っているだけで、しっかり話を聞いていけば、自分でもA+の評価を取れるということだ。他の授業にも活かしたい。」（筆者注：これこそ大事な意識転換だと思う）

「A+を取ったらやる気満々。一番前の席を座ったらまるで別の世界いろいろな知識を勉強してもらった。」（筆者注：人間は褒められると全く違う感覚と態度で物事を接する一事例だと思う。）

3. 単位だけではなく、自らから勉強する意欲が沸く。自己成長も体感できている：この授業内の比較だけではなく、以前の「私」と現在の「私」を常に意識したうえで、日々の成長を自覚するようになっている受講生も多い。これこそ我々が望ましい教育像ではないだろうか。

「今は毎回面白い映像や先生の話が聞けるので、他の授業とは違い、集中して受けることができている。単位をとるだけでなく自分から勉強しようという気持ち大きい。」

「現在では、世界の経営について興味を持ち、勉強に強いることができています。1回目の授業から、予習復習を行っていたので、多少は自分なりに効率よく勉強できています。」

「毎回のまとめの質を維持できているだけではなく、前期は時々時間内に仕上がっていなかつ

たのに対して今期はほぼ時間内に仕上がるようになったので。「弛緩」チカン × →シカン ○
「V」ボトル × → ボルト ○ （筆者注：『毎回、ありがとう！』）

「先生の授業の意味を理解でき、初めて勉強が楽しいと思えた。上手く文章をまとめられるようになった。」

「この授業を受けていくうちに経営についてもっと勉強したいと思うようになり、自分で進んで普段から動画をみたりして、勉強するようになりました。先生の授業をもっと受けたい。」

「勉強するのが大好きではないが、もっと知りたい、「どういう事なんだろ？」という疑問や「へえ～」と勉強への関心ができた。まだ勉強の自分なりの効率のいい勉強仕方は分からないが…」

「今まで全く触れたことのない「経営学」について、様々なケースを用いて説明していただくことにより、より身近に感じることができたため。株などにも興味を持つようになりました（筆者注：『あぶないよ！』と冗談気分でひとことの忠告をした。）」

4. ビデオを見るのが楽しい。毎回充実を感じる：身近な内容のビデオを受講生に見せるのは効果的な方法だとよくご存じだと思うが、残念ながらほとんどの授業では見せるだけで終わってしまう。本授業を含む筆者の教育法では、受講生はビデオをただ見るだけではなく、見た内容をキーワードやキーポイントで時間内に上手くまとめるようにする必要があるので、受講生は「知識」だけではなく、文章力やまとめ力など「能力」をも毎回実感できるようになっている。

「今はもう先生の授業が楽しくて、毎回ビデオを見るのが楽しみで学校に来ています。そしてやればA+をもらえるので、もっとがんばりたいです。」

「授業全体は満足度が高い。ビデオが面白くわかりやすいのでもっとビデオが見たい。しかし、正味の授業が難しい内容であるので段階3にはまだなれない

（筆者注：すでにできるだけ授業内容のレベルを簡単にするように工夫しているが、大部分の学生の学力はそれほど高くないので、今後の課題としてまた適当に学生のニーズに合わせた内容を引き続き調整・探索する必要がある。ちなみにこの学生は非常に真面目で毎回優秀な成績（全部A+）と毎回発言をする。ここで一つの示唆として、できるだけ簡単で分かりやすく、より現実的で実学的な授業内容の方はいい。抽象的な理論や複雑な説明は極限まで減るべきかもしれない）」

「毎回おもしろいビデオがあり、とても楽しみにしています。なので意欲的にとりくむことができる。」

「暇な時間もなくて効率的な授業だと思います。」

「授業中は静かで、VTRの時間があるため飽きずに楽しく受けているし、やりがいを感じる。」

「最初は単位。でもビデオを見ていろんな企業の成り立ちと成功の秘訣、世界有名な企業の物語までも知ることができました。知識を身に付けたと思う。」

「毎回楽しいビデオなので苦じゃなく見れています。要望として、ビデオを長くしてほしいで

す。内容は分かりやすく、ビデオも非常に面白いです。」

「この授業をなめていました。毎回のビデオはおもしろいし、もっと知りたい！見たい！といったつも思います。レジュメの内容もとても分かりやすいので、経営のかたくなるしいイメージがいきにくずれました。」

「単位取得する以外にも楽しみができた。VTRの内容が面白くて見やすい。」

「毎回、授業のまとめ文があり、気が引き締まり、毎回のよう話を聞かないといけない状態を作られているから勉強に力が入る。VTRの内容もこれからの将来に、役立つような内容で面白い上に、よい学習になるのも素晴らしい。」

「いくら経営学について学んだからといってもまだまだ知らないことが授業の中で出てきたので、ためになることは意外と少なくなかった。毎回の映像資料はもっと見たいと思えたため。」

5. 向上心、チャレンジ精神が沸いた：毎回もっといい成績、ずっといい成績を目指す。

「今までの授業では、A+を取ったのは2、3回でしたが、国際経営論では、現在、出席した感想文すべてA+である。前回出席するのが楽しいし、これからもA+を取れるように努力したいと思っています。」

「暇な時間もないし授業内容が充実していて、とてもおもしろいと思います。大企業の成功や失敗をたくさん学びたいと思っています。A+の評価をもらえるようにしっかり授業に参加していきたいと思っています。」

「A+を取るため、授業を一生懸命やります。」

6. あまり変化がないが、楽しい授業を感じる：学習意欲や主体性は変わっていないが、教室に出席すること、静かに聴講し、授業まとめ文を丁寧に作成して提出するは習慣になった。

「一回目と変わらない理由は人々が惰性ありますと思う。love to studyですけど、自主学習の意識まだ足りないです。でも、先生の授業が好き、すごいいい先生と思う。」

（筆者注：こう書いて不真面目な学生ではないかという印象があるかもしれないが実はこの学生は最初から真面目に授業を受けてきた。毎回AやA+のいい成績を取っている。また一回目は「3」または「4」、十回目も同じ「3」または「4」を記入してもらった。別の中間アンケートでは、十回目に「3」または「4」または「5」を記入したが、授業意識のプラスの変化があるように示している。「そうすると、むしろ『4』または『3』のように順番を変えて記入したらより良いのでは？」と筆者は提案したが、「そうか。そうだと思う」と頭を下げて同意の返事をしてくれたようである）

「初回の時と気持ちは変わりません。いつも面白い授業・VTR、ありがとうございます。」

自由意見・提案・要望：

この欄では、実に意見や要望はいろいろある。季節の変換次第に冷房暖房の温度・風量の調整や授業進行にともなうナイトの明るさの調整、マイクの声の大きさやハウリングの注意、教室の広さ、後ろ何列まで座ればいいのか、レジュメの内容や多さももちろん、色・背景色、穴埋めの個数までも、など実は意見や要望は多岐になり、量も非常に多い。多人数の授業なので一々すべてを満足するのは不可能であるが、「無理な要求はない。すべて対応する」といった姿勢でできるだけ対応・調整をしてみる。毎回のまとめ文も含めて、こういった形の大事な「対話」で学生のニーズを常に把握し、教学双方の信頼関係を養う。以下は一部のみを示しておく。

「発表時間を決めないと授業配分もくるうので、制限時間をもうけるべき。(たいてい、発表者は発言がごちゃごちゃで長ったらしい)」

「もっとビデオがみたいです！でもこの授業を履修して本当に良かったと思っています。楽しいです。」

「12/4 (日) 昨日誕生日なので、プレゼントをください (笑)」

(筆者注:「すべて A や A+, これは最大のプレゼントではないか? (笑い)」よくできました!) と次の週筆者は返事をしたが、この学生は「びっくりしました。先生はこれまでも返事して頂きまして、本当にありがとうございます。これからもっと頑張りたいと思います。すべて A+ を取るように！」と学習意欲満々の返事がしてくれた。非常にいい「対話」・コミュニケーションではないかと思う。)

「初めの方は、厳しい授業だと思ったが、今では集中して勉強できるので、環境も良いので、楽しい。」

「李先生の授業はこの大学で1番の授業だと思います。いつもありがとうございます。これからの残りの授業もよろしくお願いします。」

(筆者注: 一番かどうかまだ分からないが、トップレベルの授業を目指して教員も頑張らなければいけないと思う。学生の一言のご褒美も教員への励みとなり、より良い教育にポジティブな影響があると思う。)

「いつも楽しい授業をありがとうございます。「中小企業が大企業に成長する」というような講義をきいてみたいです。」

「これから、もっと人数がけずられるが、より良い授業になるなら変わらず、このやり方のままでよいと思う。私が脱落することはないと確信しているからだ。」

「木4 限国際物流論 (筆者注: 正しいのは国際経営論であるはず) の時のアンケートの時に、国際物流論なのに「経営学入門」という言葉を使って書いてしまったかもしれない。ごめんなさい。木4 限再履修のためこと書いたと思いますが、再履修は経営学入門です。また裏面の授業まとめ文では:「今回の授業でも、前のスクリーンに私のまとめ文がのりました。2回連続!!前回は初めてです。うれしくて友たちにじまんしてしまいました。やる気も上げる。次も頑張ろうと思

う。ありがとうございます。来週も頑張ります。お疲れ様です。」

「VTRをもっと見てほしいです。」

「書く字数が多い場合が度々あるので、授業スピードを少し落としてほしい。あと、タイトルで青字は全く見えない。」

「ビデオの時間の延長、お願いします。」

「VTR時間が長い。おもしろいです。」

「授業まとめ文を書く時間もっとしい」

また、2016年度前期経営戦略論の第14回に、実践運用の課題として、本学の問題点を学生に探してもらった。表9は一部の代表的な意見をまとめている⁴⁾。授業改革の参考として備考する。

表9 流通科学大学の問題点を洗い出すあなた独自のアイデア（一部代表的な意見）

回答1	まず現在在籍する学生の満足度を高めることが大切だと思う。そうすれば後輩に良いウワサを流したり、自信をもって「流科はいい所だ」とアピールし学生数も増え、経営状況もよくなり、さらに新たなイベント等を行うことができるだろう。そのために私は学生のやる気をとりにとすための授業の改善、施設の改装、部活動の活性化や、興味のある人が多い国際系の授業を追加するとよいと思う。
回答2	流通科学大学は、生徒の前に、教授がみんな自己満足で喋っていて、生徒のためっていうのが無いので、授業でも何を言っているか分からないし、やる気にもならないのだから、もう少し工夫してほしいと思うのだが、この授業はためになっているので私はとても好きです。後輩にもすすめたいと思います。
回答3	負け犬とも考える流科大をよくするためには、まず学校側が学生の目線に立って考えることが大切だ。それにより学生のニーズが見つかるだろう。そして、インパクトのある大学にするためには、在校生が高校生にすすめられるような授業のプログラムを作ることが必要だと思う。そのためには、学生がどのようなものを求めているのかを調査し、流科でしか受けられない特別感のあるプログラムの作成が負け犬脱出への一歩だと考える。
回答4	・・・そして、PPMでの流科大の問題点を改善すべき所は、ハウステンボスのように、教職員、学生が共に意識改革をすることではないかと私は思いました。
回答5	まずVTRから学びことがいっぱいありました。特にハウステンボス社長の理念「楽しく頑張る」は先生の理念を一致しました。そして、この理念はまさか流通科学大学復興する鍵かもしれません。今の大学は、熟睡してる獅子でも言えるでしょうか。勿論、この大学は潜在力があると思います。でも改革力がつまらない。学生たちがやる気出ない。もっとやる気ある先生が居れば学生たちの力を引き出すことができるでしょうか。学生たちが成長したら、学校全体も良くなる。
回答6	流科大は、授業がおもしろくないというのが私もそう思う。教授がパワーポイントを使って自己満足のようにしゃべっているだけだと私は思う。生徒がわからないような専門用語ばかりをつかってしゃべっているの話を聞いていても頭に入ってこなくてわからないのである。もっとわかりやすく説明すれば生徒も興味をもって楽しくなると思う。
回答7	流通科学大学の改善点について顧客にあたるのが生徒ということもあり、いかに学生が過ごしやすい学校を作るかというのが改善案に直結する。一つ目に部活動設備の向上。二つ目に外観の向上。3つ目に教員の向上をするとよいと私は考えた。特に3つ目の教員の向上は生徒から嫌われている人もいるので、正しいことが言える生徒にとってプラスの要素になる人をやとすべきである。

出所：2016年度前期経営戦略論第14回 160712 実践運用の回の課題より抜粋。

V. 発見事実、示唆、残された課題

本論文の事例研究により、まず発見事実として以下のことを指摘しておきたい。

1. 教学双方一同、当たり前前の大学らしい学びの場を作り直す必要があると思う。いい社風のようにいい学風も大事である。ここでは、根本的に教学双方による意識転換が要請される。

2. 「誰でも向上心がある、誰でも潜在力がある」のことである。教員による啓発型教育や創意工夫で十分に学生のやる気と学習意欲を掘り出す必要がある。ここでは大事なのは本学の学生の学力に相応しい授業内容と身近で面白いビデオなどの資料を工夫する必要がある。本学では基本的に並みレベル或いはそれ以下レベルの学生が多いようであるが、意外に質の高い学生も少なくない。要するに、教員の役割が大きい。如何に学生のやる気や学習意欲を引き出せるか、ポテンシャルを発掘できるかがカギであろう。教員の責任感・スキル・常に工夫する旺盛な熱意も不可欠になる。従来型ルーティン化された教育に甘んじるのではなく、常に危機意識を持つ必要もあるのではないかと思われる。

3. 学生の真のニーズ・心を掴み、生きた教育を実施する必要がある。迅速できめ細かい対応と対話・フィードバックが必要である。私語、温度、明るさ、音量も含め、苦情や文句、要望などへの適切な対応も必要である。

次ぎ、いくつかの示唆を提示してみる。

1. 本論文が提示した「ファイブ・モジュール教育法」はあくまでもアクティブ・ラーニング教育への一つだけの模索案である。ほかにも様々な形とやり方がありうると考えられる。

だが、共通点として指摘しておきたいのは、学生のやる気を掘り出し、効率的な授業運営、対話できる授業環境、適切な評価システムなどは不可欠の重要な諸要因ではないかと思われる。

2. 授業の運営は教員一人だけではなく、学生の協力をもらい、共同で運営する方はやりやすい。ここで、SA 制度の活用はカギだと思う。責任感の高い教員と責任感の高い SA の協力により、静かで雰囲気の良い受講環境の育成と維持に多大な効果がある。大学側も引き続き SA のような授業支援制度をバックアップしてほしい。

3. 効果の高いアクティブ・ラーニング教育を実施するために、適正な受講人数・教室規模の設定が要るのではないと思われる。今年筆者の4つの多人数授業の受講者数はそれぞれ187人、229人、271人、180人であり、すこし人数が多すぎて、精力的にとっても耐えられないと感じた時もある。前の年度では、受講者数は100人以下であった時、非常に高い効果を感じたので、やはり200人ぐらいの多人数授業になるとどうしても効果は低下すると感じる。ちなみに、本学では数百人の授業は少なくない(500人の授業もあるらしい)、可能であれば適当に受講者数を減らして、同じ授業の同時開講の形で対応したらどうだろうか。

そして、本論文の残された課題も提示してみる。

1. 教員精力の問題。

特に多人数の授業の場合、毎回学生の出席を取り、学生のまとめ文を評価し、次回フィードバックをするため、毎回膨大な情報を処理するのに精力的には教員の限界もあるはずである。受講者人数をコントロールすることは一つの解決方法かもしれないが、他の代替方法も必要だと思われる（例えば、毎回ではなく、2、3回ごとに授業まとめ文の実施）。

2. 厳しさと柔軟さの調和。

中間アンケートの結果からも分かるように、基本的に80%の学生はやる気、授業姿勢や勉強意欲など意識転換をしているようだが、意識転換の程度はまだ低い（1から2へのアップは46%、一番多い。表7を参照）。望ましい高い段階（3または4）へのアップはまだ期待されている。よって、ある程度改善があっても、まだ低い段階なので、私語・携帯いじりなど学習意識や学習姿勢の低い行動も根絶とはほど遠い。90%ぐらいの改善があれば、十分満足できる状態ではないかといった認識も知っておくべきであろう。ここでは、授業運営の厳しさと柔軟さのバランス良く調和することは芸術性のことであり、教員の豊富な教育経験と臨時応変の能力は問われるだろう。

3. 毎回の正味説明時間がただ30分なので、教育質の低下の恐れはないだろうか。これについて実は、①一部勉強の意欲が旺盛で真面目な学生は事前に入手したレジュメを予習する形でいい勉強の条件になるかと思う。授業の時の30分正味時間は本勉強の時間であるので、授業の一番大事なコア部分を理解・把握すれば十分だろう。②一方、多くの並みの学生に関しては事前にレジュメを入手していないか或いは入手したとしても勉強しなかった場合、授業の時に真面目に聴講すれば大体授業内容も理解できるならこれも十分ではないかと思う。③授業姿勢や勉強意欲が劣る一部の学生（レジュメ未入手、手ぶらで教室にきて、真面目に聴講しない学生）に関しては、少なくとも静かで聴講・視聴・課題提出の要求で対応すれば十分ではないかと思う。

ちなみにここ数年間の授業参観により、正味説明時間が30分ぐらいの授業や、グループ・ディスカッション、課題提出、プロジェクト参加発表など、多様な教育方法を活用する授業も少なくないようである。

引用文献

- 1) Arthur W. Chickering and Zelda F. Gamson (1987) "Seven Principles For Good Practice in Undergraduate Education" Washington Center News, Fall, 1987.
- 2) 南木睦彦 (2005) 「流通科学大学のFD活動の歴史——組織的取り組みによる相互的・自発的啓発の成果——」『流通科学大学教育高度化推進センター』第1号, pp.1-16.
- 3) 南木睦彦 (2010) 「全学的公開授業制度を軸としたFD活動、教員の授業改善努力と学習効果の改善」『流通科学大学教育高度化推進センター』第7号, pp.1-15.
- 4) 三浦真琴 (2010) 「Active Learning の理論と実践に関する一考察 LA を活用した授業実践報告 (1)」『関西大学高等教育研究』第1号, pp.25-35.
- 5) 三浦真琴・松田 昇子・松田 昇子 (2016) 「Active Learning の理論と実践に関する一考察 :LA を活用した授業実践報告(7)」『関西大学高等教育研究』第7号, pp.1-13.

- 6) 溝上慎一 (2006) 「カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点 -アクティブ・ラーニングの検討に向けて-」『京都大学高等教育研究第 12 号』 pp.153-162。
- 7) 溝上慎一 (2016) 「アクティブ・ラーニングの背景と展開」『IDE：現代の高等教育』7月号, No.582, pp.9-13。
- 8) 中井 俊樹 (2007) 「大学教育の質的向上のための教員・学生・大学組織の役割と相互関係『ティップス先生からの7つの提案』を活用した教授学習支援」『大学評価・学位研究 (独立行政法人 大学評価・学位授与機構)』第 4 号, pp.3-16。
- 9) 中島英博、中井俊樹 (2005) 優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト『大学教育研究ジャーナル (名古屋大学高等教育研究センター)』第 2 号, pp.71-80。
- 10) 西尾範博 (2006) 「ケース・ディスカッション授業の教育効果を高める取組み事例に関する一考察」『流通科学大学高度化推進センター紀要』第 3 号, pp.35-51。
- 11) 西尾範博 (2013) 「ケース授業における学生の変容事例に関する一考察」『流通科学大学教養センター紀要』第 3 号, pp.11-18。
- 12) 近田政博・杉野竜美 (2015) 「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識：神戸大学での調査結果から」『大学教育研究 (神戸大学大学教育推進機構)』第 23 号, pp.1-19。
- 13) 山地弘起 (2014) 「アクティブ・ラーニングとはなにか」JUCE Journal 2014 年度 No.1。
- 14) 米谷 淳 (2016) 「授業改善に関する実践的研究 13. アクティブラーニングと教員 (2)」『大学教育研究 (神戸大学教育推進機構)』第 24 号, pp.1-7。

注

- 1) 本論文での「学生の心を掴む」とは、学生の本当のニーズに対する理解と適切な対応のことを指すのである。相手の心を掴むためには、「注意・興味・欲望・動機・行動」が大事な要素との指摘がある。
<http://psychology-japan.com/get-a-heart.html>。
- 2) 従来、人間の集中力の限度は 45 分との説がある。つまり 15 分ごとに人間の集中力はピークとなる波があり、その波は 3 回繰り返すと弱くなるとのことである。これは小学校の授業時間が 1 コマ当たり 45 分と定められている理由であると思われる。一区切りでは、15 分～30 分の時間は効率が一番高いと思われる。
- 3) 初年次の「経営学入門」では、20 分で 100 文字だけの記入を配慮する。
- 4) 独自の最終アンケートを実施していないが、本学教務課が毎学期の期末に実施していた定例の「授業改善アンケート」の結果により、本教育法が実施したすべての多人数授業では、23 個ほどすべての評価科目の得点が、全学平均点以上の評価をもらい、この教育法が一定の成果を収めているかと思われる。